【第2回】　建築の特徴

　鹿島神社本殿の建築様式は一間社流造です。どう読むか迷ってしまいますが、「一間社（いっけんしゃ）」と「流造（ながれづくり）」に分かれます。

　「社」は神社建築であることを指しますが、「一間」は何でしょうか。長さの単位は１間＝6尺≒1.8ｍですが、建築様式としては、長さそのものではなく、柱と柱の間、柱間（はしらま）が幾つあるのかを示します。

　神社本殿の部屋になる部分を正面から見ると、両端に柱が立って扉が両側に開くので、一間社、つまり、御神体を納めている部屋が一つということです。

　複数の神様を祀っていても、摂社や末社として境内に別の社を建てていたり、明治の統合で合祀された場合が多いので、ほとんどの神社が一間社です。

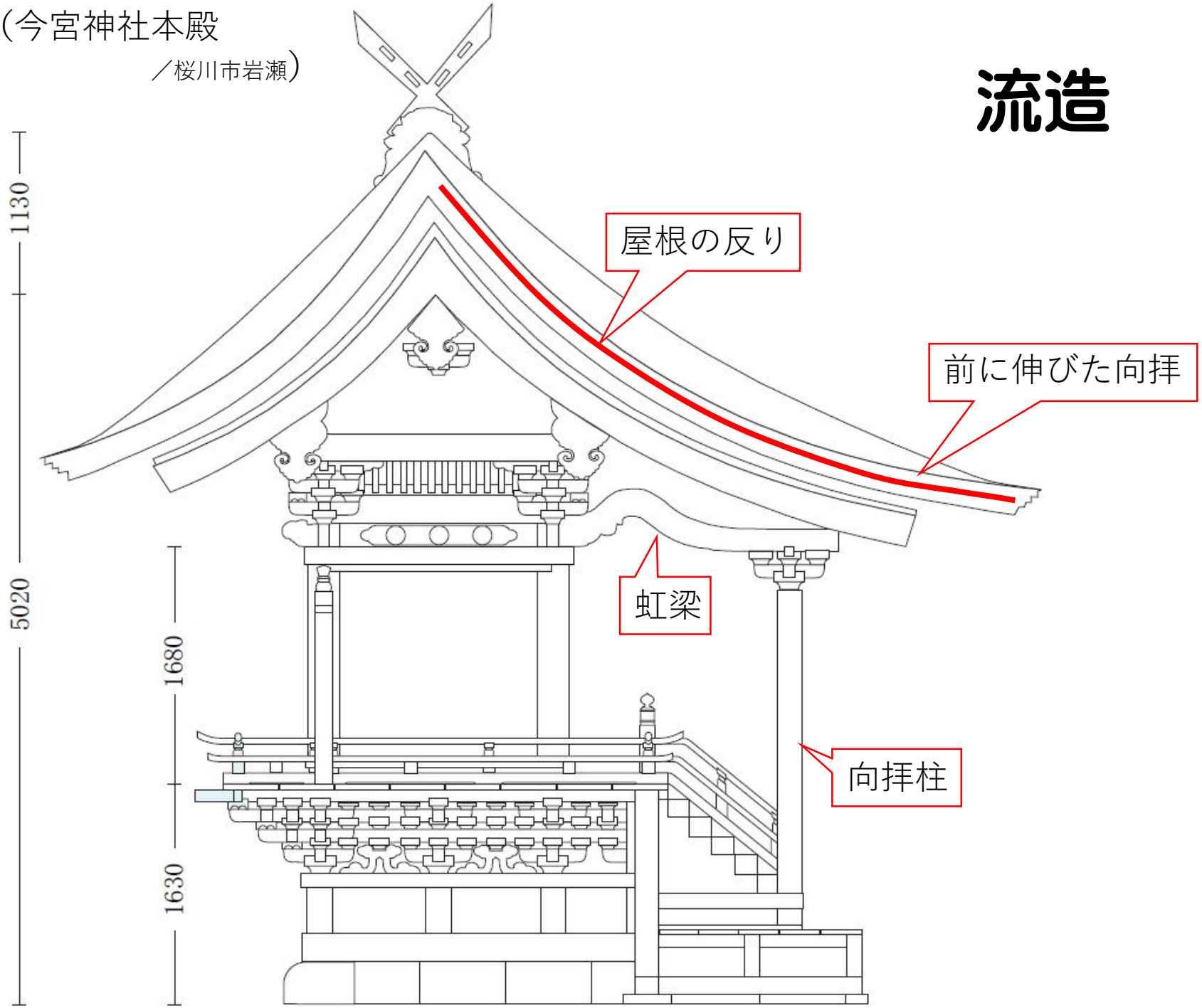
大きな神社では、この部屋が２つあったり、３つ、５つの場合もあります。一昨年に修理を行った大泉地区の鴨鳥五所神社（かもとりごしょじんじゃ）は、５つの部屋が横に並ぶ「五間社（ごけんしゃ）」という造りです。

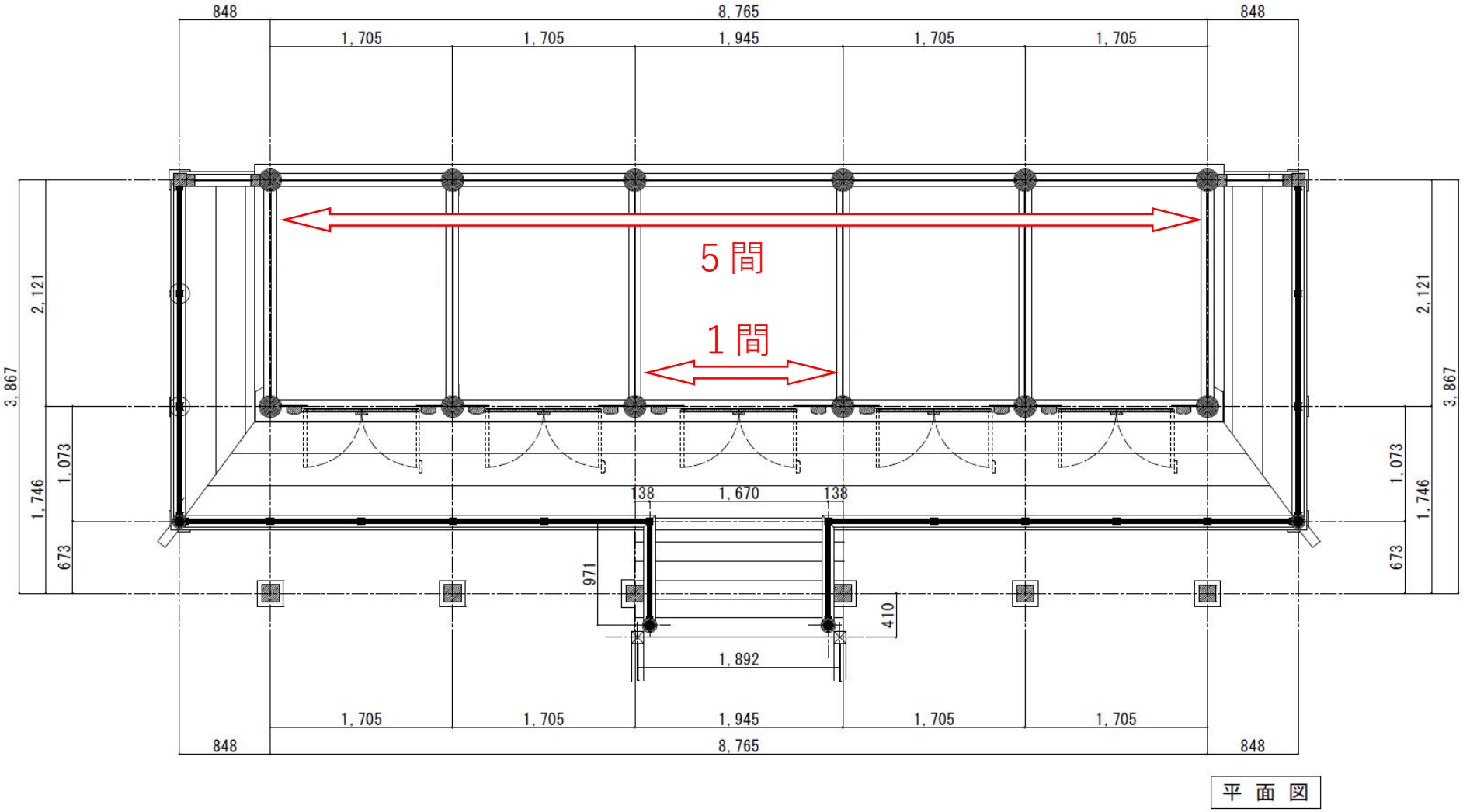
「流造」というのは、屋根の形式です。神社建築の元とされるのは、出雲大社の大社造（たいしゃづくり）や住吉大社の住吉造（すみよしづくり）伊勢神宮の神明造（しんめいづくり）ですが、いずれも屋根の正面側と背面側は対称形で直線的に葺き下ろされます。

それに対して、流造（ながれづくり）は上側に反ってカーブを描き、正面側が長く伸びて向拝（ごはい、こうはい≒庇）となる様式を指します。神社の屋根で最も多く、葺材によって、茅葺、板葺、銅板葺、瓦葺などに分けます。

参考図（今宮神社本殿
／桜川市岩瀬）

流造



参考図（鴨鳥五所神社本殿／桜川市大泉）

五間社